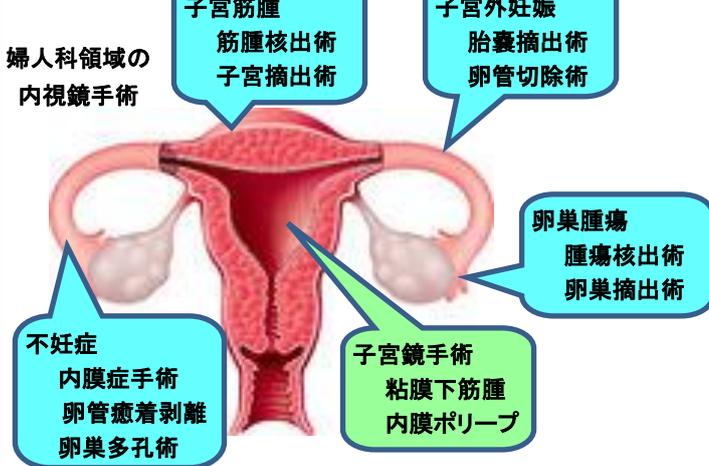




藤田和之が徹底解説 婦人科内視鏡手術のすべて

婦人科内視鏡手術のエキスパート・藤田和之が今年1月に赴任して以来、当科の内視鏡手術は新潟県内で最も多く行われるようになってきました。左下の表に示すように、2月から10月までの9か月間で計118件に達しています。卵巣嚢腫の手術が最多ですが、不妊症に対して行われたものも41件と多いことが特徴です。藤田医師が婦人科内視鏡手術について徹底解説します。

婦人科で行われる内視鏡手術には、お臍の真下からカメラを入れて子宮、卵管、卵巣の観察・処置を行う腹腔鏡(ふくくうきょう)と、膣の方から子宮内にカメラを入れて子宮内の観察・処置を行う子宮鏡があります。子宮鏡では、主に子宮内腔に突出した筋腫や内膜ポリープを切除します。子宮内腔に径1cm以上の筋腫やポリープがあると、着床が妨げられる可能性が大きく、子宮鏡で切除後に自然妊娠される方が少なくありません。



腹腔鏡は上図の青の部分で示したように、様々な婦人科疾患に対して行われています。子宮全体を摘出する場合でも、腹腔鏡で子宮の上方部分を切断したあと、膣の方から子宮を取り出す「腹腔鏡補助下腔式子宮全摘」という方法で、お腹を切らなくて行うことができます。

腹腔鏡のメリットは、1)傷が小さく美容的に優れる、2)術後の痛みが少ない、3)入院期間が短く早く普通の生活に戻れる、4)術後の癒着が少なく不妊症の方に有利、などが挙げられます。

さらに9月からはより美容面に優れた「単孔式腹腔鏡下手術」を始められています。従来はカメラの分を含め3~4箇所傷がありましたが、単孔式では図のおへその中をたてに2.5cmくらい切開して、そこからカメラや中で操作する道具をいれます。傷はおへそ1か所ですのでほとんどが目立ちません。



手術件数	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
卵巣嚢腫	3	6	5	6	3	9	7	9	4
子宮筋腫	0	1	1	2	1	1	1	1	1
不妊症	1	4	5	2	1	4	1	1	3
子宮鏡	4	5	2	3	5	7	2	3	8

~不妊症も内視鏡手術で自然妊娠へ~

不妊症の最終的治療法として、体外受精・顕微授精・凍結胚移植といった生殖補助医療(ART)があり、当科でも積極的に行っており、多数の妊娠例を出しています。

一方、不妊症の中には内視鏡手術が有効なケースもあります。内視鏡手術後には、自然妊娠または排卵誘発や人工授精といった簡単な治療で妊娠できるのが大きなメリットです。内視鏡手術が有効な不妊症には次の4つがあります。

1. 子宮内膜ポリープ、粘膜下筋腫

左側でも述べた通り、これらには子宮鏡手術が有効です。

2. 子宮内膜症

卵巣に古い月経血が溜まる「チョコレート嚢胞」に代表される子宮内膜症があると妊娠率が著しく低下します。この場合、腹腔鏡手術でチョコレート嚢胞を切除し、他の内膜症病変を焼灼し、腹腔内を洗浄することで(炎症性物質の除去)妊娠しやすくなります。チョコレート嚢胞が小さい場合などには、これを切除する代わりに内部にエタノールを15分程度注入して内膜症の細胞を死滅させる「エタノール固定」とする場合もあります。

3. 卵管性不妊とくに卵管水腫

卵管が炎症を起こして閉塞すると、内部に卵管液や炎症による液体が貯留して卵管が拡張してしまいます。これを「卵管水腫」といい、卵管が機能しない状態となってしまいます。下の写真左が卵管水腫の状態ですが、腹腔鏡で癒着を剥離し卵管をめぐり返すことで、右のように卵子をキャッチする卵管采(矢印)がきれいに現われ、自然妊娠可能な状態となりました。



4. 多嚢胞性卵巣症候群(PCOS)

本紙第120号でも述べたように、排卵誘発剤が効きにくいPCOSに対し、腹腔鏡下に卵巣にレーザーで多数の小孔をあける「卵巣多孔術」で、自然排卵が期待できます。

《産経新聞》産経新聞の「朝の詩」の9月の月間賞に、喜多文代さんの「米を抱く」という作品が選ばれていました。出産に関係のある心温まる詩ですのでご紹介します。▼「姪の出産祝いのお返しに／お米が届いた／産まれたての重さです／抱いてみてくださいと／書いてある 米を抱いて／あやしていると／思い出すこともなかった／過ぎて来た日が／立ちあがって来て／来し方の頁をめくる／私は若き日も抱いて／米を抱く」

▼赤ちゃんと同じ重さのお米をお返しにするアイデアも気が利いていますし、若き日を思い出しつつそのお米を赤ちゃんをあやすように抱くおばあちゃんの人生もまた重いものがあります。